

フリーエネルギーの発見(4)

(パルス強化回路)

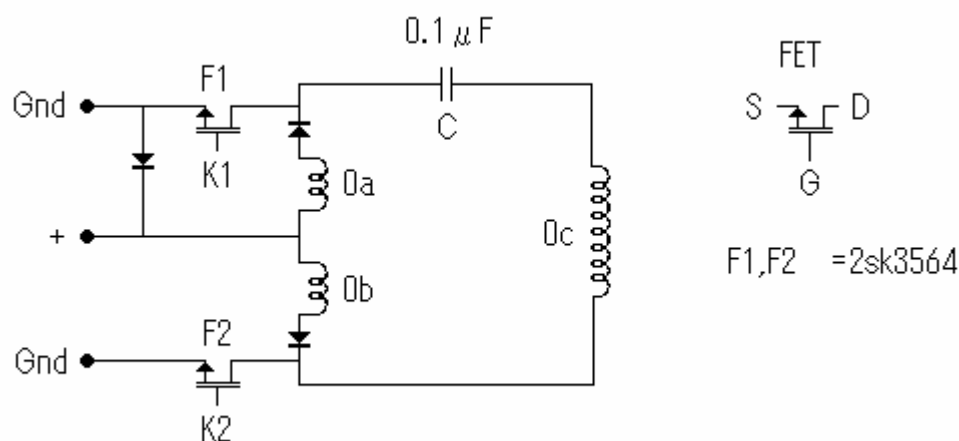
渡辺 満 (静岡県)

§0 はじめに

前回、フリーエネルギーの発見(2)(3)で紹介した、両方向パルス発生回路を、下記のように変更した。

その結果、パルス電流は、さらに強力になり、魔法のコイルの効果も、高まった。

この回路は、考案したあるものが失敗した仮定で、偶然発見したもので、「失敗は、成功の元」なのだ。

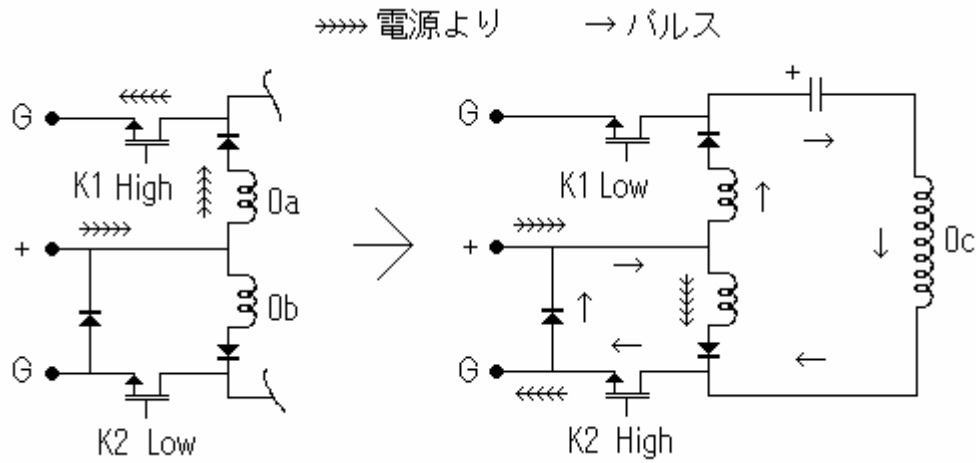


変更点を一言で言えば、「コンデンサ C もスイッチングする」である。

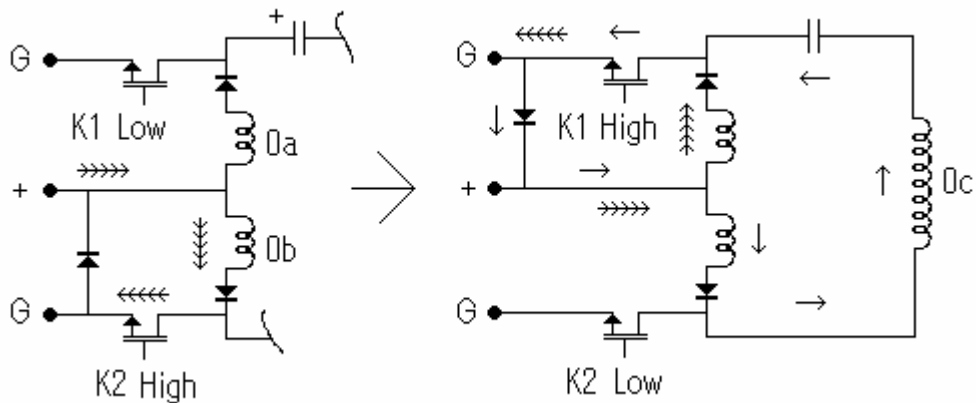
コイル 0a, 0b, 0c と同じように、コンデンサ C も K1, K2 に同期させて、スイッチングする。

これによって、パルス電流を、さらに強化する。

§1 電流図示

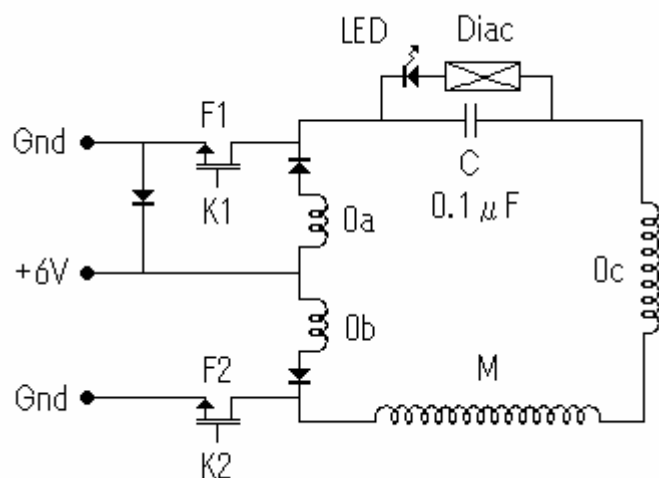


K1: High→Low (K2: Low→High) の瞬間、
 コイル 0a,0c に起電力が生じ、電流は上図右のように流れ、
 コンデンサ C の左側に、電荷が蓄えられる。
 このとき、この逆回りは、阻止されていて、C の電荷は、逃げる事ができない。
 すなわち、電荷を C に捕獲する。

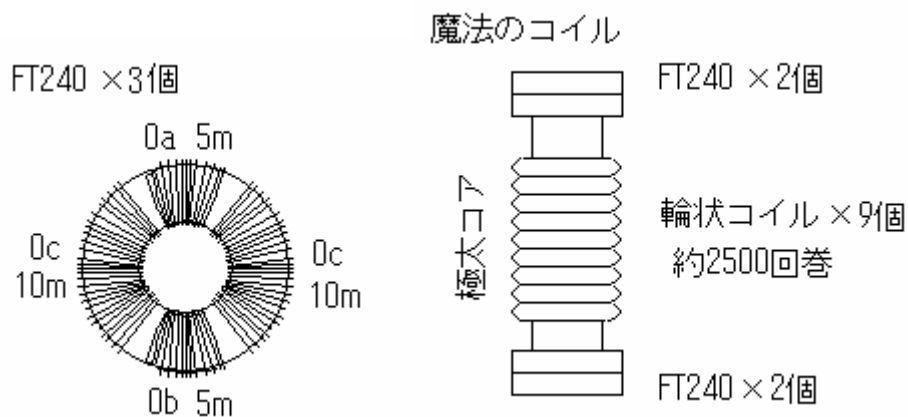


次の、K1: Low→High (K2: High→Low) の瞬間に、
 コンデンサ C の電荷は、コイル 0b,0c の起電力に乗って、
 左側に放出され(上図右)、パルス電流を強化する。
 これが、「コンデンサ C のスイッチング」である。
 コンデンサ C に捕獲された電荷の分量が加わり、パルス電流が増加する。

§ 2 魔法のコイルを組み込む



上図のように、この回路に、魔法のコイル(コイル M)を組み込んだ。



ついでに上図のように、コイル Oc を 20m に増やし、
また、魔法のコイルも、次のように強化した。
中途半端ではつまらないので、前回(3)で用いた輪状コイル(40m)を、
2 個から 9 個に増やした。これで、約 2500 回巻きになった。

このように、魔法のコイルの巻き数を増やしても、
パルス電流は、魔法のコイルを通り、増幅される。
どうも、パルス電流がコイルを通りさえすれば、強化・増幅されるらしい。
ダイアックを 10 個に固定したまま、
輪状コイルを 2 個から 9 個に、徐々に増やしていくと、
それに伴って、LED も段々明るくなるのが、観測された。

(これは、驚いてよいのでは、ないだろうか。)

ダイアック 10 個でも、LED は、楽に光っている。・・・約 20kHz

思い切って、輪状コイルを、12 個に増やそうかと思ったが、

この 9 個の電気抵抗を測ると、すでに 75Ω もある。

この輪状コイル(導線 0.32mmΦ)を、これ以上増やしても、

電気抵抗が増えるだけで、大した意味はない。

そう思ったので、ここで止めた。

今度は、電気抵抗が問題になる。もう少し、太い線を使うべきか。

●エネルギーを回収する

コンデンサ $C=0.1\mu\text{F}$ に、約 300V に蓄電された電荷が、

スイッチングによって、瞬時に 2500 回巻コイルを通過する。

これは、確かだろう。

例えば、電流がわずかであっても、巻き数が多ければ、大きな磁束ができる。

2500 回巻という、この大きな巻き数によって、

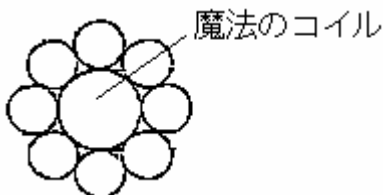
魔法のコイルには、瞬間的に強い磁束が、できるだろう。

この強い磁束から、エネルギーが得られるのでは、ないだろうか。

どうすればよいのか？

まず、頭に浮かぶのは、ハバードコイルのように、(Alfred Hubbard)

魔法のコイルの周りに、回収用のコイルを設置して、そこから取る方法だ。



これを、次にやってみるつもりだ。

ある英文サイトに、ハバードは少年の頃、テスラの研究所で働いていた、

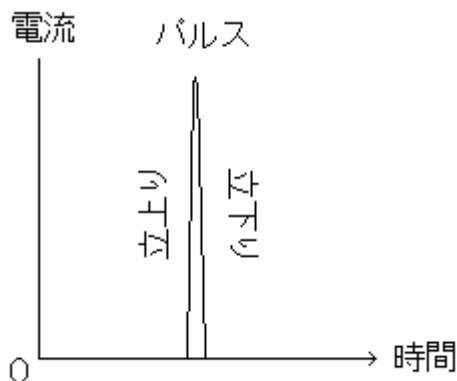
という記述があったのを、記憶している。

ハバードコイルは、テスラコイルの応用である可能性が高い。

さあ、いよいよ、佳境に入ってきた、という感じがするけれど、

さて、どこまで行けるやら。

§3 アイ起電力



ここで、改めて、魔法のコイルにとって、
なぜ、パルス状の電流がよいのか、それを考えてみよう。

魔法のコイルには、電磁誘導によって、
パルス電流の立上りでは、逆起電力が、立下りでは、順起電力が生じる。
この2つの起電力は、互いに逆向きなため、
また、わずかな時間差で起きるため、外からは、相殺されて見えなくなる。
(実際には、逆起電力の方が、若干大きいようだ。
これについては、前回(2)の§5が参考になる。)

さて、電磁誘導による起電力が、見えなくなったため、
魔法のコイルには、別のものによる起電力が、顔を出す。
それが、電磁ポテンシャルによる起電力である。
(これについては、前回(2)の§7で仮説を述べた。)

話が変わるが、人工知能をAIと言う。
ソニーのロボット犬「アイボ」の語源は、たぶん、「AIボウ」なのだ。
物理学では、電磁ポテンシャルを (A_1, A_2, A_3, A_4) と書く。
テンソル的には、単に A_i と書く。
そこで、アイボに習うわけではないが、
この電磁ポテンシャルによる起電力を、「アイ起電力」と呼ぶことにしよう。
(名前がなくては、始まらない。)

魔法のコイルが、巻けば巻くほど、アイ起電力が増大するのは、
巻き数が多いほど、電磁ポテンシャルの作用を受ける部分が、
長くなるからだろう。

(ただし、あまりに巻き数が多くなると、パルス電流の立上りで、逆起電力が大きくなりすぎ、そこで阻止されて電流が通らない。)

魔法のコイルによって、アイ起電力の存在と、その力が見えてきた。

★★ 電磁誘導を無力化して、アイ起電力を顕現させる。★★

2017年1月発行 V1.0

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2017年